

# Encourage & Company

皆さんこんにちは。  
エンカレッジアンドカンパニーの堀です。

私のコラムでは、中国の故事成語について、我々の日常に何か応用できないか、という観点で、シリーズとして書き綴っています。

第1回目は「牛耳る」という言葉についてお話ししました。

第2回目は「鳴かず飛ばず」。

第3回目は「司馬懿仲達」について。

今回第4回目は私が敬愛する李斯の言葉「我れ鳥獸にあらず」についてお話ししたいと思います。

李斯は始皇帝の時代の宰相（現代日本の内閣総理大臣みたいなもの）です。

同門の「韓非子」の著者韓非を謀殺したり、焚書坑儒（儒者の弾圧）に深く関わったり、悪臣の象徴の宦官趙高と手を組んだり、歳を重ねるごとに道を誤りますが、一念発起する若い頃がスキです。

古代法治国家（立法権・行政権・司法権が結局皇帝に集中している）の法家理論の完成者が韓非、法家実務の完成者が李スと一般的に言われています。

そもそもこの2人は荀子に学び、始皇帝に重用されるという2点で共通点があります。共通点の本質は性悪説です。人間の本性は悪であり、後天的努力により善を知り正すことができるという人間観です。私はどうも性悪説の人間観が性に合いません。「韓非子」の一文を下記に紹介します。

「君主が人を従わせる力の源は、刑（＝刑罰）と徳（＝恩賞）にある。  
悪しき臣下はこの二つを巧みに君主からとりあげようとする。  
君主は臣下に刑と徳を使わせてはならず、必ず自分が握るようにせねばならない。」

なんか私はとってもダークな気分になります。  
そんなダークな気分を吹っ飛ばしてくれる「我れ鳥獸にあらず」の全文がこちらです。

地位もなく財もなき身でありながらこの機会をつかもうとしない者は、目の前のえさを喰らうことしかできぬ鳥獸と同じです。

# Encourage & Company

人間として出世する機会があるのに出世の努力もせず貧乏に甘んじ、世間に背を向けて富貴を憎み、うぬぼれて高潔とおさまっているのは人間の本性に反するものです。

この言葉を先生の荀子に送り、李斯は大志を抱き秦の国へゆくわけです。

なんか新しい第一歩を踏み出す時の気分になれませんか？

堀 洋三